

発行日 2005年2月20日 (隔月20日発行) 通巻244号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial & Error

No.244

March - April 2005

〈特集〉

この積み重ねを、未来に!

— JVC、これまでの25年、これからの25年 —

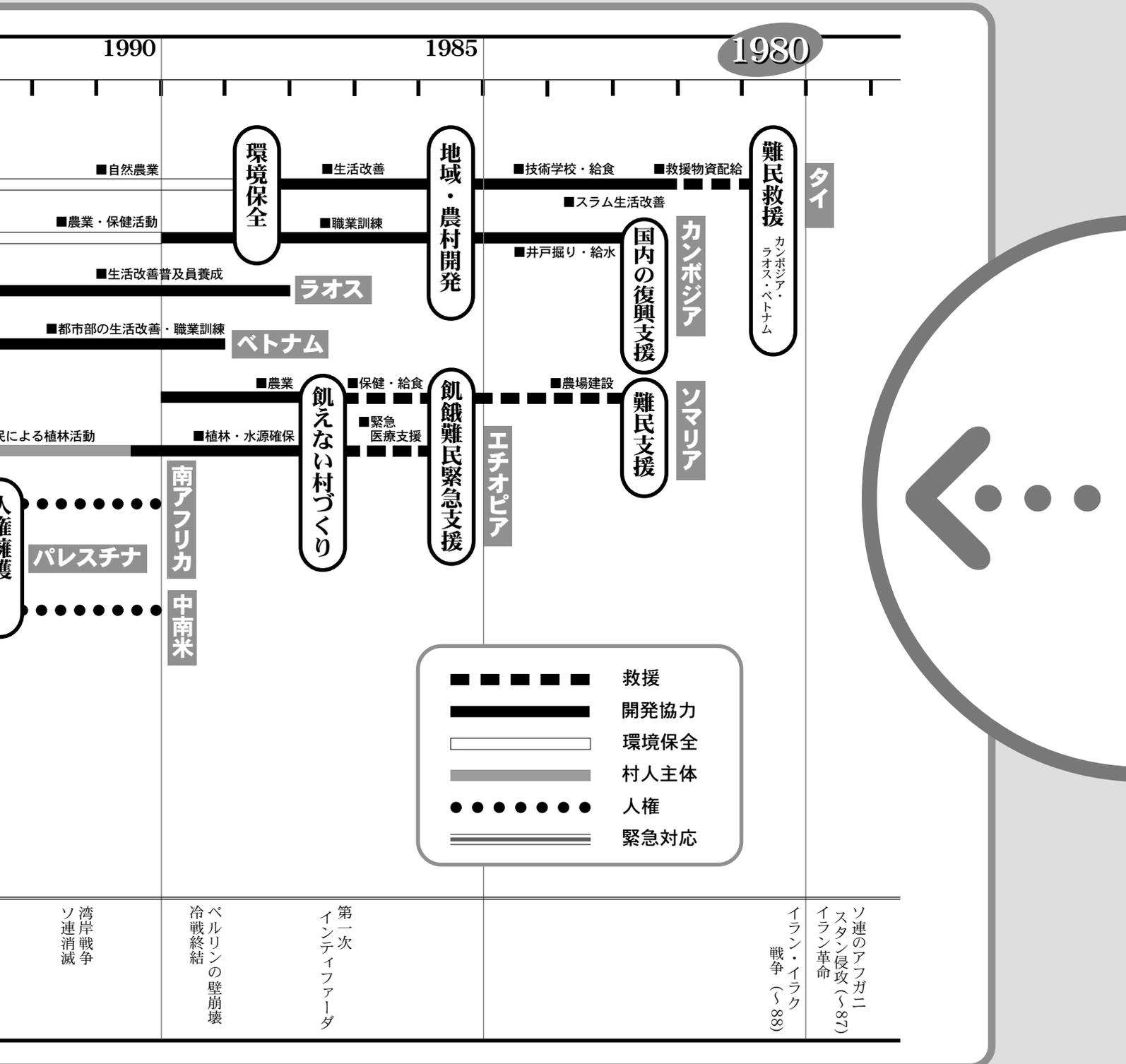
25th

JVC

Japan International Volunteer Center

JVCが生まれて25年が経ちました。東西冷戦のもとでの核兵器開発競争と世界各地での代理戦争の時代、その最大の犠牲者ともいえる戦争難民に手を差し伸べることから始まったJVCの活動は、冷戦が終わった後も続く飢餓、紛争の地への人道支援を持続する一方、村に入り暮らしの足元からの立て直しを願って人々とともに働く活動を続けてきました。

そして巨大な軍事力の一方的行使が人々の上に襲いかかる21世紀。NGOは、そしてJVCはこの世界に対し何ができるのか。25周年を迎えた今年、JVCは、そして本誌はこの1年、それを問い続けます。本号はその第一弾として、この25年を整理し、4人のJVC応援団の方々からの提言をいただきました。(編集部)



現場経験を平和構築につなげてほしい



のなか あきひろ
野中 章弘

アジアプレス・インターナショナル代表

1953年兵庫県生まれ。ジャーナリスト、プロデューサー。アジアプレス・インターナショナル代表。80年よりアジア、アフリカの戦争や紛争地の取材を続けてきた。APN（アジアプレス・ネットワーク）編集長。

JVCには今までの蓄積された経験を活かして、「平和構築」へのコミットメントを強化してもらいたいと思います。軍事力を行使しない、武力に依存しない平和構築のあり方を提言できるのは、紛争や難民発生の現場で具体的な活動の成果をあげてきたNGOだと思っております。私自身も戦争などの取材を続けながら、軍事や暴力の問題について考えてきました。結論的にいえば、やはり軍事に頼らない平和構築は可能であり、日本は非軍事的な国際貢献のあり方を追求すべきだと確信するようにになりました。

日本では憲法九条の改正が議論されていますけれども、改憲の理由として「今のままの自衛隊では十分な国際貢献ができない」という点をあげる人びとが増えています。国際貢献には軍事的な役割分担が不可欠という思い込みがあるようです。またイラクやアフガンでは「平和を築くための戦争」や「民主主義をもたらすための戦争」が行なわれています。そこには大きな矛盾と論理の倒錯があります。JVCの基本は現場の活動ですけれども、戦争に傾斜する時代の中にあつては、平和構築の具体的なビジョンの形成と提言を行なうこともNGOの責任と 생각합니다。二十五年間の経験と知恵、それに国際的なネットワークを活かした平和構築の思想の発信源となつてほしいと願っています。

JVC 応援団からの提言。

JVC とザ・ボディショップがともにめざす 「自然環境保護とコミュニティの自立」



かにせ れいこ
蟹瀬 令子

ザ・ボディショップジャパン（株式会社イオンフォレスト）代表取締役社長

上智大学卒。75年博報堂入社。コピーディレクター、同社生活総合研究所主任研究員として活躍後、93年クリエイティブ・マーケティング会社を設立。99年株式会社イオンフォレスト代表取締役社長に就任。コミュニティトレードを積極的に推進。

ザ・ボディショップのバリエーションのひとつにコミュニティトレードがある。「援助より取引」を活動目標として、サポートを必要とするコミュニティとフェアな取引をすることで、その地域の文明と環境を守りながら自立の道を促すというプログラムである。ブラジルのカヤポ族からスタートし、今では世界二十五カ国三十五以上のコミュニティと取引している。これまでに、井戸や学校、病院、そして女性たちに仕事の場を作ってきた。金銭や物資を援助するのは簡単だが、自立の道をサポートするにはサポートする側にも大きな忍耐が強いられる。その長い道のりをともに歩こうとする姿勢はJVCの活動目標と同じである。

NGOのリーダー的存在であるJVCと同じ忍耐を楽しむ。共有しながら、小さいながらも世界の平和を目指す、そのことに大きな意義を感じている。NGOとしてさらに拡大していくうえで、課題として提案させていただくならば、ファンドレイジングであれば、これからは積極的に己の経済的基盤を築いていきながら同時に、人々の間にボランティア活動をする喜びを広げていくことが必要であろう。心ある活動をダイナミックに展開しようとする、必ず経済的バックが必要になってくる。社会を変えるには自分たちの自立も不可欠なのである。ザ・ボディショップも企業として小さな一歩ながらJVCと同じ志を持って社会を変えていきたいと願っている。おめでとう、これまでの二十五年。がんばろう、これからの二十五年。

WEB サイトでOB会を



さいた よしみ 税田 芳三

UNHCR (国連難民高等弁務官事務所)
拠出国関係調整課

上智大卒。80年にバンコクでJVCの設立に参加。83～86年、JVCソマリア代表。86年からUNHCRへ。ソマリア、スリランカ、フィリピン、カンボジア、ジュネーブ本部アジア局、旧ユーゴ、パキスタンで活動。

四半世紀前、この『Trial & Error』はタイでのボランティア活動を終えた学生たちの手によって発行された。恐らく日本で初めての手づくりの難民情報誌だ。第五号はまさに手書きだったのを今でも覚えている。最初は赤字続き、第三種郵便物認可を取り付けて、始めて黒字に転向。その黒字分で、当時南阿佐ヶ谷にあった事務所の光熱費を賄うことができた。海外ボランティア、難民、NGO、ODAなどという言葉がまだまだ一般市民には馴染みのなかった時代の話。

私の場合、JVCソマリアでの活動後、八十六年にUNHCRに入ったため、二十年近く日本の外に居る。昔の同僚、友人ともほとんど連絡が途絶えてしまった。「去るものは追わず」の姿勢は僕自身がかつて持っていたものだが、五十歳を前に「去るものでも追いたい」気分が芽生えてきた。JVCのWEBサイトにOB会のコーナーを設けてみてはどうだろうか？様々な分野に散ったかつての仲間が、今のJVCを見直してくれるきっかけになるかもしれない。

今も難民の現場を歩き来しながら、JVCの創設に関わったことを誇りに思っている。その視点から言うと、JVCがUNHCRの「Co-Implementing Partner」でなくなったことは淋しい限りだ。



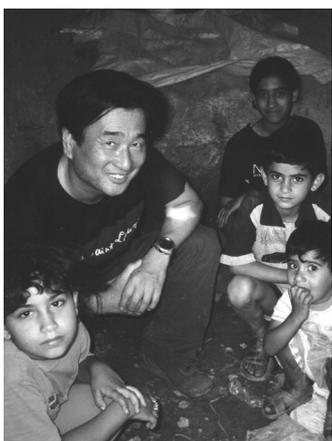
いつも勇気をもらいます

JVCの忘れられない思い出はいくつかありますが、〇三年の五月、アメリカ軍の攻撃が終わって間もないイラクへと、現地に救援活動に行くJVCの人たちに同行させていただき、十日間ほど訪れたときのことが、もっとも印象に残っています。

どんな場所にも世界中から身ひとつ、無償で駆けつけるボランティアの人たちの存在には、驚かされ、本当に頭が下がりました。砂にまみれ、傷ついた現地の人たちと一緒に泣き笑う彼らの姿に感動しました。武器など持たなくても、「救いたい」という意志の力が、彼らを強くしていると感じました。あの十日間は、私の中で大切な日々となっています。またその後、アフガニスタン緊急支援のためイベントを行ない、収益金をJVC

Cを通じて寄付させていただいたこともありました。毎年行なわれている『JVC国際協力コンサート』も、東京公演を十五年以上、大阪公演を十年以上続けてこられていいます。これも意志の力なくしてできないことでしょう。お客様にも、毎年見守ってこられた方々がきつといらっしやることと思います。この年月は、まぎれもなく皆さんが作り上げた歴史です。

JVCの皆さん、これからも冷静な眼をもって見つめるべきことを見つめ、強い意志をもってなすべきことを実行していただくください。それはあなたがたでなければできないことだからです。皆さんのことを、私たちはいつも見えています。そしていつも、勇気をもらっているのです。



(文中にあるイラク滞在時の写真)

さえぐさ しげあき 三枝 成彰

作曲家

1942年生まれ。代表作にオペラ「忠臣蔵」、オラトリオ「ヤマトタケル」、NHK大河ドラマ「太平記」「花の乱」。昨年、ブッチーニのオペラ「蝶々夫人」を下敷きにした新作オペラ「Jr. バタフライ」世界初演、好評を博す(今春、神戸で再演予定)。

戦後史のなかの JVC の誕生

JVC 代表理事 熊岡 路矢



80年にタイに渡り、現地でJVCの設立に参加。自動車修理の技術指導など、その後も現地の人々とともに活動を続ける。UNHCR職員、JVCカンボジア事務所代表などを経て95年より現職。

連帯を基礎に社会運動的なアプローチを行なうのか、保健・医療、教育、農業・農村開発など各分野での専門的な活動に徹するのか、あるいは両立を目指すべきか、という選択肢です。

例えば、世界大戦、日中間の戦争や被爆・空爆体験などの深刻な歴史的事件に関して、人々の記憶、社会に対する思いは、百年から百五十年くらいは引き継がれるものです。私たちの活動もそのくらいのモノサシで考えてみる必要があると考えます。ここではJVCを戦後史の中に位置づけてみたいと思います。

第二次大戦後の植民地解放時代を経て、一九六〇年代、「ベトナム戦争」(第二次インドシナ戦争)が始まり七五年まで続きます。これは民族解放闘争でもあり、冷戦の代理戦争でもあるという重層的な意味を持つ戦いで、小さなベトナムが巨大なアメリカを負かしたということで、世界に大きな衝撃を与え、日本にも様々な影響を及ぼしました。JVCの活動はこの戦争の後处理的なところから始まったといえます。

■歴史の渦巻き
今、国際協力NGOは岐路に立ち、いくつかの論点突きつけられています。世界を取りまく矛盾に対して

「ベトナム戦争」が終るとともにベトナム、カンボジア、ラオスは「平和」になったとはいえ、別の政治的経済的矛盾に陥り、多くの人々が難民として自国を離れます。JVCの活動はそこから始まりました。象徴的な出来事は、七八年末、ベトナム軍がカンボジアに入り、ポル・ポト

政権を倒したことです。ソ連のアフガニスタン侵攻、イランでのホメイニ革命と、この時期は世界史を揺るがす政治的イベントが相次ぎます。JVCが生まれたタイでは七六年に学生を中心とする民主化闘争の中で民主政権が誕生しますが、七九年に軍事クーデターで倒されるといって大きな血みどろの事件がありました。

日本では、絶対天皇制が敗戦で倒れました。占領軍は「民主化」を進めたあと、米ソ対立、新中国誕生を受けて、逆に一気に革新勢力に圧力をかけられます。これと平行して、戦後復興・近代化、工業化、経済成長が進みます。平和憲法と日米安保、保守と革新が共存する微妙な均衡が日本を包み、真の対抗軸が見えにくくままに九〇年代まできました。運動面での国際的な動きとしては独裁政権下にあった韓国民衆やフィリピン民衆との連帯運動が、七〇年代半ばから動き出します。

■さまざまな個性が集まって

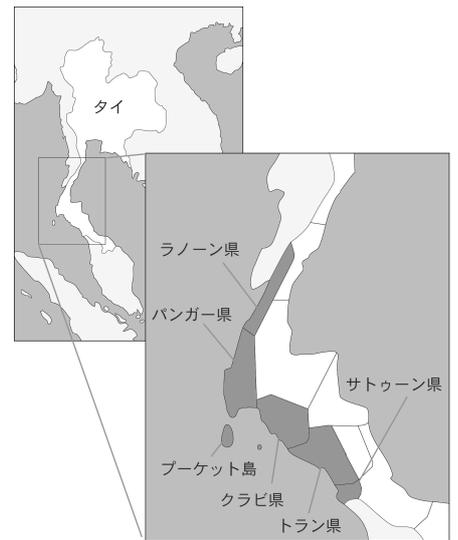
そうした時代背景のなかでJVCは誕生します。地雷原であるタイ国境を超えて逃れてくるカンボジア難民や、海に流れ漂流する「ボート・ピープル」への思いは幅広く共有された感情であったと思います。既存の日本の組織からの派遣ということではなく、素朴な人道的な思いで何かをしたいと思っている人、政治的

な意思をもった人、ジャーナリスティックな興味にかられてきた人、何かから逃げたい人、「自分探し派」など様々な背景の人々が勝手に集まってきました。基本的に個人の集まりで、組織性は限りなく薄いというのが初期のJVCの特徴でした。次第に組織的に形を整えるなかで、タイにおける、日本の国際的な諸活動の受入れセンター的な役割を担うようにもなりました。内部では自然発生性と組織性、自発性と専門性、無償奉仕か有償の活動か、プロかアマか、日本社会に深く根ざすのか、ある種の「国際性」をもとにするかなどいくつかの論点がありました。なかでも難民救援が開発か、という論点は、八〇年代にJVCが二つに分かれるかどうかという議論でもありました。一応、並立という結論になりましたが、これはある意味、永遠の課題かもしれません。

活動のうえででも考え方のうえでも多様である「人の集まり」をまとめる際の鍵は「情報の共有とこれに基づく合意の形成」ということでした。その点を叩き込んで教えてくれた、岩崎駿介さん(前代表)と星野昌子さん(前事務局長)の大きさを想起し、また発足初期にお二人を含む多くの稀な個性と出会えた奇跡をかみしめるとともに、その後「ドングリ」の集団として進めてきた十年、そしてこれからの旅路について考えます。



■タイ南部の被災地の様子（初期被害調査時・左上から時計周りにトラン県スイカオ郡、バンガー県クラブリ郡、バンガー県タクアバ郡、バンガー県クラブリ郡）



■主な被災地域（タイ南部）

スマトラ島沖地震・津波被害支援緊急報告

大型支援が届きにくい村々へ――。

アジア・アフリカを襲った未曾有の災害。JVCは、これまでに培ってきた現地NGOとのネットワークをいかし、タイ南部の被災地への支援を行ないます。

■壊滅的被害を受けた村も

○四年十二月二十六日にスマトラ島で起きた地震による津波は、タイ南部を含め、アジア・アフリカに甚大な被害を及ぼしました。JVCでは、タイ事務所のスタッフが十二月三十一日からタイ南部の被災地に入り、現地NGOとの協力のもと、最も被害が大きかったといわれる地域で被害状況の調査にあたりました。

調査の結果、外国人観光客が多く訪れるようなリゾート地（プーケット島やピビ島など）に対しては優先的に多くの援助・支援が入っている一方、現地の人たちが暮らしている小さな漁村や農村では、壊滅的な被害を受けた村であるにも関わらず、まだまだ支援が行き届いていないという状況が明らかになりました。

■現地ネットワークとともに

この調査結果をふまえ、タイのNGO・漁業組合・JVCなどの団体が集まり、救援活動のためにネットワーク（名称・The Collaborative Network for the Rehabilitation of the Andaman Community）を設立しました。JVCはこのネットワークを通して、現地の人々が主体となる復旧活動を支えていきます。

初期の被害調査に続いて、一月下旬には支援状況の把握とネットワークとの協議のために代表の熊岡がタ

イに赴きました。同時に、現地調整員として有田ゆり子をタイ南部に派遣しており、現地の復旧活動をサポートするとともに、日本への情報発信を続けていきます。
（タイ事業担当 松岡京子）

支援内容

- ・小規模漁民の船・漁具・仮設住宅の支援
- ・臨時学校の建設
- ・海岸の生態系や資源の回復
- ・被害状況をまとめたデータベースシステムの構築、ウェブサイト“Save Andaman”の開設
- ・政府の支援政策に対するモニタリング・提言
- ・救援活動から得られる教訓の資料化

※支援の最新情報は、JVCホームページに随時掲載していきます。

パレスチナ現地調整員

藤屋 リカ

この年明け、世界的に注目される2つの選挙が実施された。パレスチナ、そしてイラクで。その地の人々の未来を大きく左右することになる選挙。そこで生き、暮らしている市井の人々の様子をお届けする。

■投票しない、という選択も

ヤセル・アラファト議長の下に伴い、一月九日、パレスチナ自治政府議長選が行なわれた。議長選では十八歳以上に選挙権があります。有権者は、登録期間中に選挙登録をし、登録証と自治政府が発行する身分証明書を持って投票に行きます。選挙前日の時点で約百万人が選挙登録をしており、この数は有権者の約三分の二でした。パレスチナ選挙管理局は、未登録の有権者も身分証の提示で選挙ができる措置をとりましたが、未登録者の投票率は低かったとのこと。

選挙管理局の発表では、七十七万五千四百六十六人が投票したので、登録と未登録を含めた実際の有権者の約半数が選挙に参加したことになります。議長選には七人が立候補しましたが、アラファト氏の後継者といわれてきたPLO（パレスチナ解放機構）最大勢力ファタハのムハンマド・アッバス（アブ・マーズン）氏が六二・三％の票を獲得して議長に選出されました。非暴力を掲げて無所属で出馬した人権活動家で医師、医療系NGOの代表でもあるムスタファ・

バルグーティ氏も一九・八％と健闘しました。

有権者の約半数は投票に行かなかったことになるのですが、意志を持って投票を棄権した人や投票に行けなかった人々もいます。七十三歳で難民の女性は、家族がみな投票に出かけるなか、棄権を選びました。政治に関心が無いわけではなく、「自分たちの政府もないような状態で選挙をしようとするの、それに選びたい人もいない」と小学校にも行っていない彼女は語りました。その意見が、同じく選挙を棄権した四十代のNGO男性職員とほぼ同じだったので印象的でした。

■未来のための《力》を

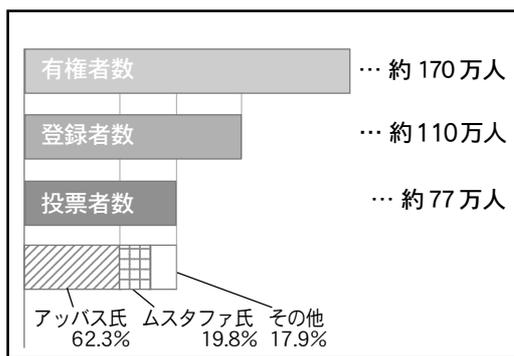
バイトジブリン難民キャンプに住むカマルさんは、七歳から十九歳の子ども六人の父親で、選挙監視員としての登録もしていました。選挙の前日、彼は議長選では人権活動家のムスタファ・バルグーティ氏を支持すると語りました。「ムスタファ氏が選挙に勝てると思っているのではありません。しかし、アブ・マーズン氏が九割の票を獲得するのと六割とは意味が違います。ムスタファ氏への票

は、今の自治政府に対する批判としての票でもあるのです」との考えでした。

選挙後のパレスチナについては厳しい意見で「アブ・マーズン氏が新議長になってもムスタファ氏が議長になることがあっても、《静かなとき》は訪れるかもしれませんが、平和への道は厳しいでしょう。《静かなとき》とは（九〇年代後半の）オスロのときと同じです。銃撃戦はなかったかもしれませんが、私たちの移動の自由さえ保障されず西岸地区ではユダヤ人入植地がどんどん建設されました。それが平和ですか？ 私たちパレスチナ人が平和を獲得するにはまだ《力》不足です。私が言う《力》とは、交渉相手と同じテーブルについて、自分たちの権利を正當に主張し、それを相手に納得させる《力》なのです」と語り、ため息をつきました。

カマルさんは、JVCが支援する難民キャンプ内のハンダラ文化センターの運営メンバーでもあります。昨年十月から新しい子どもための教室を始めるときも、アラビア語で書かれたプロジェクトの詳細を苦労しながら英訳しつつ、活動の必要性を熱く語っていました。

カマルさんは、平和な社会を獲得できる力をつけていくために何が必要かまでは語りませんでしたし、声高に政治を語ることもありませんでした。しかし、彼の子どもたちに対する真剣な働きを見ていると、次世代を担う子どもたちが《力》をつけていけるように、地道に教育に力を注いでいることが伝わってきました。



■右側の少女はあと2ヵ月で18歳。「今回投票できないのが残念。でも、7月のパレスチナ評議選では必ず投票に行く」と話す。

原文次郎

イラク現地調整員（ヨルダン駐在）

■生活よりも選挙？

イラクでは一月三十日に国民議会選挙が行なわれました。この結果を受け、国民議会により大統領と副大統領二名と首相が指名され、内閣が作られます。その後、憲法案が起草されることとなります。

事前の予測よりも高いとされる投票率を受けて、今回の選挙が「成功」であったと盛んに報道されています。投票を妨害する攻撃による死傷者数が、当初の予想より少なかったことも、選挙結果に対する楽観的な判断材料になっています。

しかし、選挙当日の様相を伝える報道の中で、最も印象的だったのは、南部の都市バスラで、停電の中、ランプの灯を頼りに開票作業をする模様でした。JVCの支援活動の地元の協力者も、バグダッド市内の状況として、一日数時間しか来ない電力事情と、きれいな水の供給がないという窮状を訴えていました。

主要な戦闘が終結したと言われてから一年半以上が経ち、主権移譲後でも半年が経過しているというのに、人々の生活に必要な基盤が確保できないという

実情は、人々の生活実感とこの国の政治体制との間の距離を感じさせます。戦後の占領体制の欠陥がこの国の基本的な仕組みづくりをここまで遅らせてきたと言えるかもしれません。

今回の選挙をきっかけに状況が好転することを期待したいところですが、伝えられる状況は必ずしも楽観的な期待を抱かせるものではありません。

南部の都市では投票率が高かったと言われており、実際に、バスラのA医師からは、投票に行くに聞いていました。

しかし、治安状況の悪い北部の都市モスルのB医師は、数週間自宅待機が続き、勤務先の病院にも行けず、患者さんが何よりも心配だと訴え、「最近是自己に居るのも危険になったので、郊外の別の町に避難した。投票などとても行ける状態ではない」という有様でした。

バグダッドのC氏は、市内で撃ち合いが続く模様を伝えた後、選挙には行かないとして、「投票所に行くのが危険だ」という治安理由は二の次で、一番の理由は今回の選挙が信用できないことだ。候補者もサダム政権時代の苦難の時代を海外で過ごしていた者が多く、イラク人の

本当の苦勞を知り、そして代表できる者がいない」と言っていました。

■独立への道は続く

このように、今回の選挙で積極的に投票に出かけた者と、そうでない者がはつきりと分かれる結果になったのも気になることです。イスラム聖職者の呼びかけもあって投票に積極的に参加したシリア派と、自治権の獲得を目指す動きからクルド地域の人々が多く投票した一方で、スンナ派の人々が選挙をボイコットしたとして、これらの三つのグループの「分裂」を強調する解説もあります。

しかし、一方で、これらの分裂を強調することで、「イラクはひとつ」だとして事実上の占領体制を脱したいとするイラク人の独立の意思を見誤らないことも必要と思われる。

また、「分裂」は必ずしも宗派

と民族で大別される上記の三グループの話に限ったことではなく、選挙のための連合で今までは蜜月状態だった政党各派が、選挙後にそれぞれの利害を巡って対立することを恐れるとした、ファールージャ出身のD氏の話が気になることです。

このように、社会の安定と生活基盤の復旧が進まない中で実施された今回の選挙の裏では、国内、国外の諸政治勢力、宗教勢力の駆け引きが垣間見えまます。今回の選挙の成否の評価は、今後の国民議会の成り行き次第と言えます。

■アンマンのバス停に貼ってあった、在外投票を呼び掛けるポスター



■今後のイラクの政治日程

一月三十日	国民議会選挙ののちに国民議会発足。基本法イラク暫定憲法 制定及び大統領を選出。その後、大統領が首相を指名し、国民議会の承認を経て移行政府発足。
八月十五日まで	憲法草案作成。
十月十五日まで	憲法承認の国民投票実施。
十二月十五日まで	新憲法下での総選挙実施。
十二月三十一日まで	正式政権発足。

ラオス

森の民・森に 守られた暮らし

カムアンプロジェクト担当
田坂 直之

ラオスの村人の暮らしがどれほど森林に支えられているか、実際に見るまではいまひとつイメージがわかなかった。しかし農村に通うにつれ、村人の暮らしがいかにか森と密接に結びついているかがわかってきた。

JVCの活動するカムアン県の村では一般的に、天水田で主食のもち米を作り、小川から小魚や貝、森から木の実や小動物などの多様な食材を採集して食べる、という暮らしを営んでいる。農作業よりも「採集」にかける時間の方がはるかに多い。林産物は建材や魚籠などの生活用品の原料になる他、貴重な現金収入源ともなる。森に行くのは主に男性の仕事で、乾季には一日中、時には一週間ほど森にこもることもある。「何キロもあるキーシー(樹脂)をとってき

たんだ」と自慢したり、疲れて森から帰ってきた夫に、妻が「これじゃ足りないわよ!」と言って夫婦喧嘩になることも。いずれにせよ、森とともに暮らしてきた村人にとって、森を失うということは生活基盤を脅かされるといふことだ。これまで

同県では天然資源採掘やユーカーリ植林などの企業活動により土地や森を失ったり、森林を伐採されるケースが散見されている。また、JVC活動村のナカイヌア村が長年利用してきた森は、ナムトゥン2ダム計画の予定地内にあり、ダム施工により水没すれば、村人は他の土地に移住を余儀なくされ、漁業と換金作物栽培で生計を立てる生活へと大きく転換を迫られる。村のある女性は「私たちは今までずっと、米を作り、森のものを採り、自然の中で暮らしてきたんだ。それ以外の方法は知らない。将来が不安だ」と語る。

JVCは「土地森林委譲」を通して村人に土地や森の使用権を保障する活動を行なっているが、それでもやってくる開発の波に変化していく暮らしをどう支援していけるのか、大きな課題である。

message from the field



プロジェクトの現場から

写真：森に囲まれたラオスの村と水田

新潟中越地震

外国人被災者への 多言語情報提供

事務局長
清水 俊弘

昨年十月二十三日に発生した新潟中越地震に際し、JVCはラオス事業などで協力関係にある新潟国際ボランティアセンター(NVC)と相談し、被災地域に在住する外国人に対する支援を決定しました。

具体的には、被災地の一つである長岡市の国際交流センターが在住外国人約二千人を対象に実施する、中国語やポルトガル語などの多言語による情報提供を支援しました。提供される情報は、配給物資の種類や配布日程の案内など避難先での生活に不可欠な事柄が中心です。また、不自由な生活や余震などによるストレスの問題にも対応するため、多言語でのカウンセリングも行なわれました。

これらの活動の準備に際しては、阪神大震災の時にJVCも

応援した多文化共生センターの経験が活かされました。幸い、在住外国人の方々の住居は無事で、早い時期に避難先から戻ることができ、今回は大きな混乱を招くこともなく対応できたということです。

しかし、今後もしもいざというところで大規模な災害に見舞われる可能性が強いことを鑑み、都市型災害である阪神大震災の経験と、山間部の災害である中越地震の経験から教訓を学び、次の災害が起きる前に在住外国人の支援システムを構築するシンポジウムが二月に開催されることになりました。被災地に暮らす人々が、被災者の立場を乗り越え、教訓の発信者として、積極的な活動を担おうとする姿勢に敬意を表したいと思います。



■今回の被災地には多くの外国人が在住している。

※皆さまからご支援いただいた募金については、本誌十五ページに掲載しています。

スタッフのひとりごと

もう一つの市民社会？

ベトナム事業担当 新井 綾香

2004年12月23日、休日にも関わらず朝7時に起き、皇居へ向かった。そう、この日は何をかくそう天皇誕生日。私は友人に誘われ、天皇一家を一目見るために皇居にやってきたのだ。いや、実のところは、私は皇族自体に興味があったのではなく、“皇族に関心のある人”に興味があった。皇族をこんなに朝早く見にくる人とはいったいどういう人なんだろうという関心を持って、皇居に来たのだ。

入口で紙製の日の丸をもらって皇居の中に入ると、そこには想像以上に多くの人がいた。200~300人くらいはいるだろうか。こんな朝早く皇居に来るのは右翼ばかりかと想像し

ていたが、驚いたことに、その半数はごく普通の若者だった。10代、20代の人も多く見られる。10時45分、天皇一家が現れた。すると、みな一齐に歓声をあげ、日の丸を振り出した。まわりの勢いに圧倒され、私もちょっとだけ日の丸を振ってみた。

皇族一家が現れるのは1日に3回。1回ごとに人は入れ替わるので、概算でも600~900人くらいの人がこの日に皇居を訪れることになる。目の前にいる、日の丸を振り歓声をあげる大勢の普通の人の姿を見て、改めて日本市民の姿を見た気がした。

NGOは右翼と対極に位置すると見られることが多い。私が見た人たち



イラスト/かじの 倫子

は決して右翼ではないのと同じように、私たちNGOも決して左翼というわけではない。同じ普通の市民として、互いの歩みよりができれば、どんなにか大きい力が生まれるだろう。

帰り道、私の友人は「家にある大きな日の丸を持ってくればよかった」と、少し後悔していた。その友人は昨年、JVCの会員になってくれた。

『百姓が時代を創る』



山下惣一/大野和興著 七つ森書館 1800円+税

冒頭でいきなり度肝を抜かれた。東京のシンポジウムで「日本に農業が存在しなければならぬ理由は何か？」という質問が出たという。私には質問自体が信じられないが、自給率が低くても日本は実際飢えていないし、飲食の八割が加工食品と外食という今の日本では、その低さを実感する場も少ない。ただし自給率云々と言っても多くの人に納得してもらえないだろう。これに対して、生粋の農民作家の山下惣一さんと農業ジャーナリストの大野和興さんは、自ら体験・観察してきた農業近代化による農村の変容と現在を、「百姓」と「土」という視点から捉え返そうとする。特定の作物しか作れず、それに依存する今の農業者にも何でも総合的にやれて自立している「百姓」を、単に面積で測られ作物の根を支え

みるよむきく

るだけになった土地に生命のかたまりで先祖から預かり次の世代に受け渡していく「土」を対置し、こうした生き方・価値観の豊かさを農が日本社会に存在する意義として提示している。近代化の果てに自殺にまで追い込まれる農業者の厳しい状況と対照的に、百姓という存在を生きる人々の姿は魅力的で、心の中心にすっと入ってくるような真っ直ぐな説得力がある。対談はさらに、日本と同じ状況がグローバルゼーションによってアジアや中南米の農業者にいつそう悲惨な形で現れている現実をえぐりだすが、そこでもドロクを作り、地場の市場を立ち上げる百姓たちとの出会いが、閉塞する世界の新たな可能性であることが示されている。

こうして二人は、「百姓が新しい時代を創る」と高らかに宣言し、「みんなが百姓になる」と呼びかけている。山下さんも大野さんもJVCの強力な応援者である。その二人の呼びかけは、この会報誌を読むすべての仲間に対するJVC二十五周年の一番のプレゼントである。

(総務 壽賀一仁)

《開発協力》

THAILAND

タイ

地場の市場づくり

東北部コンケンで、地域循環の流通システムを作り出すために「地場の市場」づくりを進めている。十二月下旬にポン町の直売市場の二周年記念式典を行い、郡長や医師、消費者代表など、多くの人々が参加した。記念シンポジウムでは地場の市場の意義を確認するとともに、有機野菜の大切さなどが話された。アトラクションとして野菜の大きさコンテストなどもあり、楽しいひと時だった。この日から市場は週一回の開催から週二回(月、金)となる。(倉川)

農村で学ぶインターンシップ
一月下旬、毎年恒例のインターン卒業生合宿を行なう。約十五名が参加する予定。(松岡)

津波被災地支援
十二月二十六日に、スマトラ沖で大津波が発生。同三十一日よりタイ南部での被害調査を行なった。現地NGOと漁業組合のネットワークを通して漁村への支援を行なっていく。一月下旬から一カ月間、一名がタイ南

部に駐在する。(森本)

CAMBODIA

カンボジア

持続的農業と農村開発(SARD)

安全な水や食糧の確保を目指して、九十四年から活動。本来であればコメの収穫が終わり一息つく季節だが、今年は干ばつでほとんどコメが収穫できず、都市部へ出稼ぎに出る人が多い。また、浅井戸や池がすでに枯れ始め、本格的な雨季に入る五月までの生活水を心配する住民が多い。そのため、まだ井戸を設置していない村を中心に、乾季でも枯れない折衷型井戸の設置を急いでいる。(山崎)

資料・情報センター(TRC)
持続的農業や農村開発に従事する人々に資料を提供するため九十五年から運営。〇四年の活動レビューを行なった結果、利用者数は引き続き増加傾向にあり、特に学生の利用が増えていることがわかった。今後、NGOスタッフなどにも広く利用してもらえよう、情報発信の改善を検討している。(山崎)

技術学校
自動車修理と溶接を学ぶ職業訓練校と付設整備工場。プノンペン校二年生は〇五年夏に卒業

予定だが、すでに企業就職内定を得た者もいる。移転の件は、橋向こうでない市内の移転先が可能かどうか日本大使が関心をもち、カンボジア政府への回答を延期した。

シアヌークビル校は、新入生を受け入れておらず、経営を担う運輸局長が新労働職業訓練省への修理工場と職員の移管をしないよう運輸大臣に直接交渉することを試みる。(米倉)

調査研究・政策提言

トンレサップ湖の自然資源管理を、地元住民が漁業共同体(漁業組合)を作って行なえるよう支援。コンポンチュナン県にて漁業関連政令集と漁業共同体運営に関する教本を用いて、村人、県漁業課、軍や警察など関係者の啓発ワークショップを三月末まで継続する。土地調査は、調査報告書を最終化中。ラタナキリ県先住民の共有林管理を促すNGOのNTFPの組織強化は難航しており、新代表雇用と常任理事会の創設は二月にずれこむ予定。(米倉)

LAOS

ラオス

森林保全と自然農業(カムアン県)
開発の進みそうな幹線道路沿

いで、村人の森の権利を保障する「土地森林委譲」を行なっている。十二月からポンサン村で実施し、約三週間で無事終了した。また、乾季の水不足に備える井戸補修の支援をムアンカイ村で実施し、浅井戸用セメントリングづくりが終わった。

自然資源管理(ソングラ省)

カムアン県には開発の波が押し寄せている。十月半ばにラオ村でセメント工場による土地の強制買収が行なわれた。また十二月始めには、ブンホアナカン村の森が近くで操業しているベトナム系の企業によって石膏採掘のため伐採されてしまった。これに対して、村で事情と意見をまとめた文書を作り、県と農業局に提出することになった。(田坂)

VIETNAM

ベトナム

農村開発(ホアビン省)

〇四年から三年の延長期に入ったホアビン事業では、持続的農業と環境保全についての活動をしている。環境教育や対象地域住民の希望と現状に適していると思われる傾斜地農法とアヒル水稲同時作等に取り組んでいる。これまでアヒル水稲同時作を実践してきたハイフォン

市、ソングラ省などの農家も参加し、一月にタンラック郡で経験交流と技術研修を行なった。総勢百名もの参加者が熱心に研修を受け、関心の高さがうかがえた。(伊能)

SOUTH AFRICA

南アフリカ

農村開発(東ケープ州カララ地区)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指して、〇二年より環境保全型農業の研修と普及を行なっている。十一月には、年三回実施している家庭菜園のモニタリングを九カ村で実施し、十二月には、レベルスクルーフ村で六日間の自然農業ワーク

シヨップを開催した。

雨期に入って、土壌流出の激しいカラリザーブ村の共同菜園では、流出を防ぐために等高線を測量し、これに沿ってペティバ草を定植した。(小林)

子どもの教育支援

(ジヨハネスバーク市)

オレンジファーム地区で地域住民が運営するテボホ障害児ホームを支援。昨年十一月五日にあった火災で台所や洗濯室が全焼したため、仮の台所で食事を作りながら復旧のための資金集め、資材調達などを行なっている。十一月末には子どもたち三十二人とスタッフ二十人が動物園を訪問。初めて動物を見る子どもたちも多く、貴重な時を過ごした。(津山)

HIV/AIDS調査(リンポボ州)

南アで深刻な問題となつているHIV/AIDSに取り組みするため、南ア北部のリンポボ州四カ月の現地調査を実施。二十団体の現地NGOを訪問し、その中からエリム地区で地域の女性たちが中心に活動する「ティボネレリ」と協力することを決定。○五年四月から予防・啓発、感染者へのケア・サポート、エイズ遺児支援等の準備を進めている。(津山)

《緊急対応》

AFGHANISTAN

アフガニスタン

東部地域医療支援

・地方クリニック支援/郡で唯一の医療機関であるクリニックを支援し、医療技術の向上と運営の改善を目指す。クナール県保健局から来年度以降の支援継続要請を受けて計画準備中。一月からクリニック運営サポートとモニタリングのため、JVCから男性看護師を常駐させている。冬季に特徴的な気管支系の病気の患者が多い。

・女性医療従事者養成コース/女性研修センター内の教育や実習環境改善を目的に、教具や備品、電気器具を○五年度早々に支援する予定である。

・伝統産婆の職能向上研修/安全な出産ができるよう、村で産婆さんのトレーニングを行なっている。伝統産婆四十九名への第三回フォローアップを終了した。JVCがクリニックを支援しているカスクナル郡での研修は治安悪化のため遅れていたが、二月に実施の予定。(谷山)

シギ高等女学校支援

シエワ郡シギ村での女子学校

増設は十二月半ばに完成し、県教育局に移譲した。この間日本の子どもたちと手紙での交流をすすめている。(谷山)

政策提言・ネットワーク

十一月末から約二週間、武装解除プログラムへの提言を目的とした第二回調査をカブールで実施。現在、アフガン内外のNGOと提言申し入れの準備を進めている。(谷山)

IRAQ

イラク

ガン・白血病医療支援

ヨルダンを拠点に、薬品の支援を継続。選挙による治安悪化に伴いヨルダン・イラク間の国境が閉鎖されることも考慮し、J・M・N・E・T(日本イラク医療支援ネットワーク)の参加団体である「アラブの子どもとなかよくする会」「アジアと結ぶ市民の会・長崎」と協力し合い、入手可能な白血病治療薬約四千五百八十ドル分をバスマラの病院へ緊急に支援した。(原)

ファルージャ緊急支援

十二月にはファルージャでの戦闘が一段落したとの報道があったものの、軍事衝突は依然続いている。市内の家屋等が大きく破壊されたため、十二月末

になつても避難民が戻って生活を始めることは困難な状況だ。特に今年の冬は冷え込みが激しく、避難民の状況はさらに厳しい。このため、周辺地域の避難民への食料や医薬品の緊急支援を続行。十二月には避難民支援用としてラマディ病院に二回、計四千二百ドルの医薬品を、またバグダッド等にあるファルージャからの避難民キャンプ(約六百名)にも医薬品六百七十ドル分を提供した。(原)

PALESTINE

パレスチナ

幼稚園児栄養改善支援

九月末からのイスラエル軍のガザ地区北部侵攻によつて被害を受けたジャバリア難民キャンプの幼稚園の補修は完了したが、子どもたちの心理面への影響が懸念されている。牛乳とビスケットを提供している幼稚園の子どもたちを対象に、地元スタッフやアル・クツズ大学の関係者が、十二月に身長・体重測定を実施した。学期の終了する五月にも同じく測定を行ない、子どもたちの成長を確認するとともに幼稚園の先生、父兄にも子どもたちの健康について喚起を促していく。(藤屋)

難民キャンプ子ども文化支援

ベツレヘム地区 Beit Jibrin 難民キャンプのハンダラ文化センターには女性刺繍グループがあり、伝統刺繍をいかした財布やバッグなどを製作している。収入創出とともに、製品の売り上げの一部がセンターの活動にあてられ、母親が子どもたちの活動を支援できる仕組みを作りつつある。JVCは、商品開発やマーケティングで協力、製品を買い取ることで活動を支えている。定期的に売れる製品も出てき始め、女性たちの励みにもなっている。(藤屋)

KOREA

コリア

南北コリアと日本のともだち展

子どもたちの絵画の地方巡回展が、日本各地で開催されている。兵庫展は、県下の在日コリアン青年・学生団体の協議会が主催。東京展に多数出品のあった名古屋の小学校や、板橋の朝鮮学校では、出品した子どもたち本人が絵画展を楽しんだ。また、新潟展やさいたま展では、講演やギャラリートークなど、独自に多彩な企画が行なわれた。二月上旬には、福岡アジア美術館でも開催される。(寺西)



■東京公演の様子

JVC 国際協力コンサート 2004

おかげさまで盛会でした。

メサイア

十二月十一日に大阪、十八日に東京にて『JVC 国際協力コンサート二〇〇四・メサイア』が行なわれました。今年の『メサイア』は、両公演あわせて約四百名の合唱団員が歌い、すばらしい指揮者、独唱者、オーケストラの出演による感動的な公演でした。昨年を大幅に上回る収益となりそうです。ご協力、ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。

◎「心優しさから出発している会はずばらしいです。どうして世界平和というのが実現

国内ひろば

JVC network

できないのかと思います」「メサイアを全部聴かせていただいたのは初めてです。JVCの働きも知ることができました。今日までの練習ご苦労様でした」(来場者アンケートより)

◎「大変素晴らしいコンサートに仕上げられ、楽しい一時、感動のシーン、涙ぐむ一節を過さずせていただきました」(合唱団員より) (JVCコンサート事務局)

石川 朋子

二〇〇五東京公演に出演する合唱団員を募集しています。聴く側から、歌う側へ。詳細はホームページをご覧ください。

URL・<http://www.ngo-jvcnet/contest/>

JVC設立二十五周年に向けてのアンケート集計結果報告

お待たせしました！

昨年秋口に本誌に同封いたしました、JVC設立二十五周年に向けてのアンケートの集計結果をご報告いたします。

本誌への要望を聞く質問①では、用意した回答の他にも「活動から見えてくる日本の課題をもっと載せては」「会員に

してもらいたいことや、実際の例を紹介したら」というご意見をいただきました。

質問②では「メディアでは伝わらない情報、活動地の生の声が届きたい」という声が多かったです。テレビや書籍、

インターネットだけでは活動地の本当の姿は伝わらない、ということでしょう。

会員特典の要望を聞く質問③は、「限定イベントや情報を」という声の一方で、「特に必要ない」が七割弱でした。

今年で二十五周年を迎えるJVCでは首都圏以外の皆さまとの交流を模索しており、そのための質問⑤では、スタッフ報告会、講演会、活動地関連の映画会が上位となりました。企画検討時の参考にさせていただきます。

紛争関連の報道が多い昨今において、環境及び貧困問題への関心が高いことが示された質問⑦は、皆さまの意識の現れだと思えます。「本場の課題は何か、その原因は？」と考へ続ける姿勢をJVCも忘れずにはならないと思えます。

最後に、「応援します」「活躍に感謝」というたくさんの声がありがたいお言葉と同時に、「団体としてプロ化が必要」「スタッフ・会員双方方向の交流を」というご意見もいただきました。活動地はもとより、国内においても今後も皆さまに支持されるような活動を続けていきたいと思えます。

(会報誌レイアウト/会員担当) 細野純也

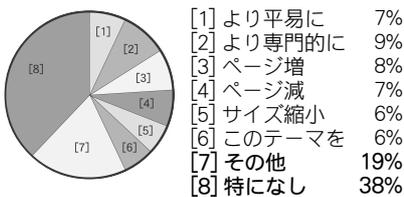
アンケート概要

目的：会員の皆さまの本誌・25周年企画・国際問題などへの関心を把握し、今後のJVCの活動に役立てる
対象者：JVC会員及び本誌購読者
配布数：約1200件(本誌No.240に同封)
有効回答数：106件(回答率：約9%)
回答方法：FAX、インターネットで返送
記者名：81名、無記名者：25名

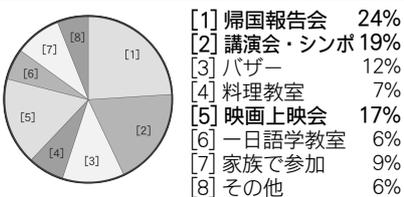
質問(要約)

- ①本誌への要望
- ②本誌及び会員向けメールマガジン以外でのJVCへの関わり方
- ③会員特典の要望
- ④JVCからの情報提供の量
- ⑤25周年での地域イベントへの希望
- ⑥⑤のイベントへの参加形態
- ⑦興味のある国際問題
- ⑧その他

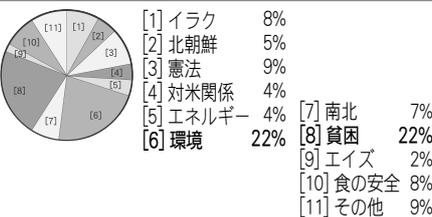
質問①



質問⑤



質問⑦



募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

11月計 **8,189,864 円**

12月計 **5,691,533 円**

	11月	12月
無指定	944,565 円	617,873 円
タイ	1,003,000 円	3,000 円
(津波被害)	—	85,000 円
カンボジア	2,500 円	120,000 円
ラオス	31,000 円	88,120 円
ベトナム	62,450 円	5,000 円
南アフリカ	5,000 円	324,535 円
パレスチナ	361,500 円	525,500 円
アフガニスタン	118,251 円	363,580 円
北朝鮮	0 円	45,000 円
イラク	5,510,822 円	3,513,925 円
JIM-NET	150,776 円	0 円

※ JIM-NET に関しては、本誌 no.241 をご覧ください。

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金は JVC 活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

11月計 **246,000 円 / 33 件**

12月計 **438,446 円 / 48 件**

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としやクレジットカードを利用する手軽な募金方法です。

11月計 **410,150 円 / 372 件**

12月計 **421,650 円 / 392 件**

編集後記

『今』というのは、『歴史的今』ですよ。だから、歴史をどう見るか、つまり歴史認識がなければ、これから先のことも、きちんと見ることはできないし、人々を納得させることもできない。

JVCは今年25周年を迎えました。これから1年、本誌ではJVCの歴史と志をふまえながら、これからの25年を、会員や本誌を読んでいただいている皆さんとともに考える企画をお伝えしたいと思います。(お)

第6回 JVC 会員総会を開催します

JVC会員総会は、前年度活動報告と今年度活動計画をJVCスタッフが説明し、これを会員の皆さまに承認していただく重要な場です。正会員の方はぜひご参加ください。

- 日付：2005年6月11日(土)
- 場所：東京都内(未定)

JVC 国際協力カレンダー 2005

「祈り」

おかげさまで **22,000 部**



今年も、JVC 国際協力カレンダーのご利用ありがとうございます。おかげさまで、22,000部ほどのご注文をいただきました。昨年には及ばなかったものの、近年の中ではご利用が伸びました。

このカレンダーの販売をご自身のライフワークかのように一生懸命周りの方に勧めてくださる方も少なくなく、そのご協力があったこれだけの数字になりました。JVC への大きなエールです。

収益金はイラクでの医療支援はじめ、パレスチナでの栄養改善プロジェクト、ベトナムでの農村支援などに使わせていただきます。

(JVCカレンダー事務局 荻野 洋子)

■ 皆さまへのお願い ■

このJVC国際協力カレンダーについてのご感想・ご意見をお聞かせください。来年度以降の制作・販売に役立たせていきたいと思っております。

カレンダー事務局・荻野 TEL:03-3834-2388 E-mail:ogino@ngo-jvc.net

新潟中越地震被災者支援にご協力くださり、 ありがとうございました。

皆さまからのご支援は、被災地である新潟県長岡市での在住外国人向け多言語情報提供活動にいかされました。

2004年12月末時点

271,000 円

[この金額は、ページ左上のJVC募金の欄には含まれておりません]

お詫び：本誌の号数間違いについて

隔月で会員の皆さまにお届けしている本誌ですが、昨年末にお届けした号(2004/12/20発行分)の号数が間違っていました。

誤：No.242 → 正：No.243

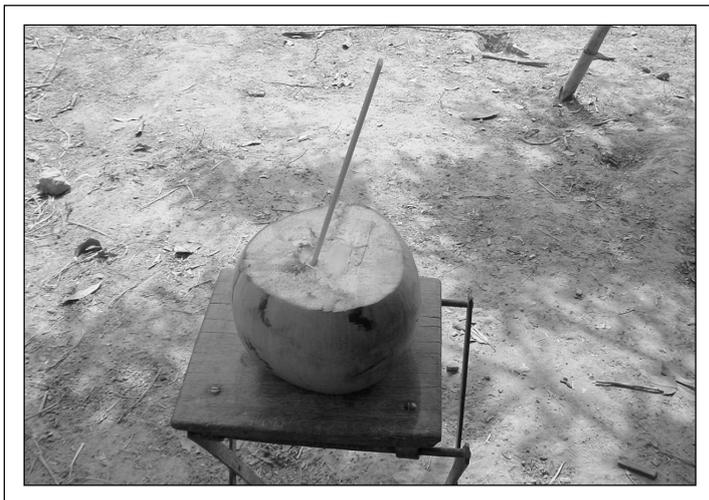
このために、本号を“243”を飛ばして“No.244”といたします。皆さまには御迷惑をおかけいたしましたことを心からお詫び申し上げますとともに、今後はこのような不手際がないよう厳重に注意いたしますので、何卒お許しくださるようお願い申し上げます。 会報誌レイアウト担当 細野 純也

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

72

Cambodia



「稲の茎」 ストロー

普通の村でもプラスチックのストローが普及しているカンボジアだが、ある日、村人がココナツに稲の茎を刺して出してくれた。(カンボジアで持続的農業を普及する現地NGO「CEDAC」の活動地のひとつ、プレイヴェン県の村にて撮影)

■訂正：前号(2004年12月20日発行分)の「暮らしを彩る道具(71)」欄の説明に誤りがありました。正しくは以下ようになります。お詫びして訂正いたします。
「800mほど離れた水源から高低差を利用して水を引き、右側の水がめにパイプを通して溜める。水がめの水は、各種生活用水として使用される。写真は洗濯をしている様子。」



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
 - ◎学生会員 5,000円
 - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当へ。

hosono@ngo-jvc.net

会員数(2月3日現在) 合計1,541人
(正会員 655人 賛助会員 886人)

■ オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
 - 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。